

北海道建築士

HOKKAIDO KENCHIKUSHI 2014.9.27

目次

第39回全道大会(旭川大会)開催
..... 1
A 分科会、B 分科会 2
C 分科会 3
青年サミット 4
編集・発行:(一社)北海道建築士会
情報委員会
URL <http://www.h-ab.com/>

三浦綾子の小説「氷点」のまち 旭川で全国大会以来21年ぶり 第39回北海道建築士会全道大会(旭川大会)が開催される

第39回北海道建築士会全道大会が9月26、27日の両日、旭川市において開催された。大きな大会は、平成5年の全国大会以来21年ぶり。大会は晴天に恵まれ392名の参加のもと、テーマ「都心 ルネッサンス」、サブテーマ「氷点のまち 輝くみらい」を掲げ、分科会で熱い議論が行われました。

27日、旭川市公会堂で開催の大会式典で、大会実行委員長の石川旭川支部長から「旭川は、北海道の内陸部に位置しながらも、海産物や農作物の集散地であり『食のまち』として、また、旭山動物園や周辺の景勝地、温泉地などと相まって、『観光のまち』としてもその名を馳せるようになった。今、建築士の資質の維持・向上及び業務環境の改善と共に会員増強の推進が重要課題である。会員一人一名の勧誘活動を行うなど、積極的そして継続的に取り組むことが重要。東日本大震災の復興が依然として進まない中、さらに「西日本大震災」と「平成関東大震災」といわれる二つの巨大地震が極めて高い確率で発生するといわれている。我々建築士の責任は極めて重大であり、同時に、社会の発展のため最新の指導者であり、地域社会のトップリーダーとしてその職責を果たすことが使命である。旭川出身の小説家三浦綾子氏の代表作『氷点』が発表されてから50年、奇跡の復活を遂げた旭山動物園に学び、都心の再生をテーマに市民と共に歩む大会をめざします。」と挨拶がありました。

続いて、高野会長から「旭川市では、平成5年に北



海道において札幌市以外では初めてとなる全国大会が盛大に開催された。あれから21年、旭川駅が建替えられ、周辺の整備も進み、変貌ぶりに目を見張るものがある。是非、旭川市中心街のまち歩きをしていただき今大会のテーマ『都市ルネッサンス』を実感していただきたい」と挨拶がありました。

多くの来賓の中から北海道知事、旭川市長、建築士会連合会三井所会長からご挨拶をいただき、会長表彰では、19支部34名が受賞され、代表の旭川支部 石関康弘様より感謝の言葉がありました。

基調講演では、動物たちの「行動展示」で日本一の動物園になった旭山動物園。園長 坂東元氏によりお話しいただきます。

また、会場では昨年より引き続き被災地応急支援特別委員会による被災地応急支援ネットワークの登録への呼びかけが行われ、20名近くが新たに登録されました。総登録者は200名を超えました。

A 分科会**素材のチカラ「木」がマチを再生する！**

「木のまち」旭川市は、林業や世界的に有名な旭川家具製造が盛んでありましたが、安価な輸入木材や建物の不燃化促進の影響などで、一時の勢いはありません。しかし、近年、公共建築の木造化推進などにより、木は再び注目されてきました。

女性委員会の A 分科会では、数年前からの継続として「北海道の建築素材」を題材としていることから、旭川を含む地方都市の都心再生の起爆剤とすべく「木」の持つチカラを探っていくことにしました。

会場ではまず、本間女性委員長挨拶ののち、3名の講師を迎えてパネルディスカッション形式の分科会が始まりました。パネリストの皆様には最初にそれぞれの「木」とのかかわりを自己紹介も兼ねて語っていただきました。



NPO 法人もりねっと北海道理事の山本様は、木を育て、森林を守る人材育成等の山林を守る側の立場、生産者側としてお話をいただきました。

林産試験場の大橋様は、林産試験場の最新研究や公共建築物の木造化などで林業を活性化しそれが地方都市の活性化につながる可能性についてお話をいただきました。

木工クラフト制作会社リーフスタイル代表の千葉様は、地場木材の端材を使い、木工製品を制作することにより、地域に対する愛着を育て、そのことによりマチが元気になるとのお話をいただきました。

その後、トークセッションに入り、コーディネータ

ーがパネリストに共通の質問として、我々、建築士に求めること」をテーマに質問を行いました。

山本氏は「森の応援団」をキーワードに、経済的に林業が持続できるための担い手となってほしいとお答えいただきました。

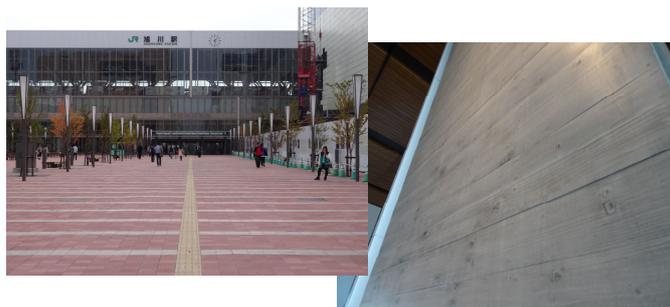
大橋氏は「50年のブランク」をキーワードに、建築士は道産材の主要なユーザーとして、国内林業の復権を担ってほしいとお答えいただきました。

千葉氏は「開口部を広く」をキーワードに、家具の搬入スペースの確保など、オーナーと建物の架け橋になってほしいとお答えいただきました。

この分科会では、3人の「木」の専門家の方々から「木」を通じて、マチの再生についてのヒントをいただいたことから、今後の我々の活動に生かしていくことを期待します。

B 分科会**賑わい from<買物公園>**

昨年 11 月にグランドオープンした「旭川駅」からまちあるきはスタート。上川倉庫群にある「蔵囲夢」「大雪地ビール館」を見学したのち、一行は日本初のホコテン「買物公園」へ。参加者は総勢 80 名。集合場所でもあった旭川駅南口にて JR 旭川駅の大矢二郎氏に解説を伺う。設計は内藤廣氏。買物公園の中心が駅舎の EPJ と合わせたのも内藤氏のこだわり？。内部は道産のタモ材を使用し、柱型のコンクリート打放しはトド松の型枠を使い木目を出す。「名前を刻むプロジェクト」実行委員長の犬矢氏は市民に一口 2,000 円の寄付を集め、下見板張りのタモ材に 1 万人のローマ字の名前が刻まれました。外観のカーテンウォールから四又支柱が覗き夜の明かりもきれいな駅舎に生まれ変わりました。



上川倉庫群は明治 30 年代（1897～）に建てられたレンガ造りで有形文化財に指定されています。その倉庫を改造した「蔵囲夢」は 1996 年にギャラリー館として開業。丁度、椅子の展示会が開かれていました。



倉庫群を後にし、一行は銀座よりもいち早く 1972 年（S47）に歩行者専用道路としてオープンした買物公園をあるく。五十嵐広三氏の構想 10 年の尽力によるものです。「まちあるき」終了後はホテルにて、平塚清隆氏（旭川まちなかマネジメント協議会事務長）に「歴史を観光資源として」の講演をいただき、今回の B 分科会「まちあるき」は終了しました。



C 分科会

あさひかわのみらい

～楽しく賑わう「都心ルネッサンス」を描く

かつての『にぎわい』を中心市街地に取り戻そうと全国各地で様々な取り組みが行われていますが、ここ、旭川市においても、旭川平和通買物公園を軸とする時間消費型の回遊空間の創造やまちなか居住の推進、さらには観光客の呼び込みなどを基本に、中心市街地活性化に向けた取り組みが種々行われています。

青年委員会主催の C 分科会では、現在、再開発が進められている北彩都地区の一角に、青年建築士の目線で、あさひかわのみらいに求められているものを企画・提案しようというワークショップが行われました。

はじめに、針ヶ谷青年委員長による主催者あいさつの後、本部青年委員の小林さんによる趣旨説明、さらに、旭川支部の斎藤青年委員長より、旭川市の紹介ならびに前日開催した青年サミットの報告がありました。そして、約 80 分という短時間のワークショップとなりましたが、企画書に、①キャッチコピー、②コンセプト、③ターゲット、④施設概要と 4 つの項目が事前に設けられていたこと、また、参加者 107 名のほとんどが、青年サミットで「まちあるき」を行っていたこともあり、会場内の 10 テーブルでは、和気あいあいと活発な議論を取り交わしながらも、スムーズに配置・平面計画やイメージパースの作成作業が進められましたが、最後の発表は、限られた時間の中で 7 テーブルからとなってしまいました。

「リバー彩都あさひかわ」というキャッチコピーを掲げた 3 番テーブルからは、観光案内所を兼ねた市民及び観光客の体験・参加型複合施設というコンセプトで、子育て世代をターゲットとして、水族館、ものづくり体験ができる工房やショップのほか、憩いのテラスなど自然景観を活かした施設を作るという提案があったほか、それぞれ創造性豊かなものばかりでした。

様々な個性のぶつかり合いから一つの作品を導き出したこの取り組みが、それぞれの職場、支部での活動に活かされることはもちろんのこと、新たな仲間たちにも伝わり、継承されていくことを期待したい。

青年サミット**～あさひかわの未来****ばかばかしい発想から見えてくるものがある～**

昔の賑わいを取り戻すため…。日本初恒久的歩行者天国の平和通り買物公園、生まれ変わった駅、それらを中心とする周辺開発もほぼ終了し、都心の再スタートを切った旭川。しかしながら“人で溢れる都心”の姿はまだ見えてきません。何が足りないのか？

～今の“あさひかわ”に必要なものは…～

「若者、バカ者、よそ者がまちを変える！」と、よく言われます。全道から集った100名を超える青年建築士が“あさひかわ”について語り合いました。

第1ステージは“まちあるき”。駅前、緑の景観、新旧混在の街並み等、違う顔を持ちつつも何処もが旭川を表現している4つの地区（買物公園、銀座商店街、神楽岡地区、旭町地区）に分かれて歩きました。途中のクイズを解きながらグループ内のコミュニケーションを深め、自らの脚と肌と“客観的な眼”で、それぞれの“あさひかわ”を感じ取っていたようでした。



第2ステージは“ワークショップ”。「都心再生へ、旭川に必要なものを提案する」ため、4地区の意見をもち寄り、再編成されたグループ毎に熱心な議論が交わされました。

最初に、それぞれが歩いて感じた“良いところ・悪いところ”の情報を端的に伝え合い、旭川が持つ4つの顔を全員が理解し、共有してから議論へ進みました。

発表では、「人を呼び込むための魅力ある素材が“点”でしか存在してないため、それらを繋ぎ“面”として発信、また核となるランドマークをつくり集客力を増す発想が必要」という意見が多く出されました。具体案として、「商店街を結ぶ交通網（地下鉄・市電・共通駐車券）を整備する」、「屋形船で川のまちをアピール

する」、「旭川特産を駅前に集約する」等の案の他、「家具づくりの技術を活かし、スカイツリーを超える木造タワーを建てるべき」という意見まで飛び出し、流石はバカ者の“発想力”というところでしょうか。その他にも、「緑は癒やし空間として残すべき」、「商店街ごとの統一した街並みづくりが必要」等、都心の再生へ繋げるような意見が出されました。



最後は、長谷川常務理事の「ばかばかしい発想でも仲間と議論することで見えてくるものがある。このような会を大事にし、ぜひ来年の紋別でも続けてほしい」とのコメントでまとめられました。

第3ステージの懇親会も大盛り上がりでした。

**＝ 編集後記 ＝**

昨日の青年サミット、そして今日の大会と皆様お疲れ様でした。情報委員会「編集局」の号外いかがだったでしょうか？

自ら足を運び動きのある取り組みを目指してまいりました。

尚、大会の詳細につきましては12月号をご覧ください。来年の号外もお楽しみに！